

# まえがき

## 歴史の授業の総まとめとして位置づける

15年戦争の単元は、ここまでの歴史の授業のまとめとして位置づけている。この場合の「まとめ」とは、今までの学習内容を踏まえての歴史学習のまとめという意味だけでなく、これまでの話し合い活動で身に付けたであろうはなしあいや討論の力を発揮して、歴史の見方や考え方を深めていくことのまとめの意味も含んでいる。つまり、授業内容と授業方法(話し合い活動)の両方のまとめとして位置づけている。そのため、話し合い活動の場面も、これまでの単元より多く設定している。特にこの単元の授業内容は現在につながるものが多く、討論の論題も切実なものが多い。そのため、活発に意見を交わせるような授業づくりを心がけている。

## 被害の事実・加害の事実を取り上げる

15年戦争の単元では、被害の事実だけでなく加害の事実も取り上げ、日本のおこなってきたことを正面からとらえさせ、そして考えさせるように授業づくりを進めた。そのときに留意したのは、単なる「戦争反対」というレベルの意見にとどまってしまうようにすることだった。

そのため、当時の国民の様子や考えをもとに、話し合い活動を数多く実施することを心がけた。そしてその際、授業内容に切実さを持たせ、共感できる事実を取り入れて物語ることで、生徒を授業に引き込むようにした。

## 単元全体で歴史の事実を物語り、考えさせる

歴史の事実を物語るとは、1時間毎の授業だけでなく、単元全体としても起・承・転・結を意識した構成にしていることを意味している。だから、この単元の授業では日本が戦争を起こし、アジア諸国に対して侵略行為を進めていくところから始めている。ところが途中でこの状況が逆転していく。つまり、日本がアジア諸国に対してやってきたことを、今度は日本がやられる立場になっていくのである。そして最終的には、日本は自ら始めた戦争に敗れることになる。この流れを単元全体として大きくとらえると、起・承・転・結の構成として考えることができる。そのため、事実を物語れるような形で取り上げていくことができる。

こうした学習の中で、「どうして日本は満州への侵略を始めたのか」「果たして日本の行為は正しかったのか」「その後、どんなことを日本はおこなっていったのか」「日本がやっていたことを、どう見るのか」。そして、「形勢が逆転していく中で日本が攻撃を受けるようになるが、それは仕方ないのか」「負け続ける状況にありながら、日本が戦争をやめなかったのはなぜなのか」「この戦争の結果は、どんなことになったのか」「この戦争の責任は一体誰にあるのか」「この15年戦争の単元、更に近現代史の単元全体を振り返ると、日本はどこで、どんなことで間違ったのか」などを生徒に考えさせるように授業づくりを進めている。そしてここでも、明治政府への評価につながる学習ができるのではないかと考えている。そのことをつなげるのが、前単元(現代の始まり)の最後に討論させた「今後の日本の取るべき道は、大日本主義なのか、それとも小日本主義なのか」で生徒に考えさせた内容なのである。

以上の学習がきちんとできていけば、生徒の学習を「いまを生き、これからの未来を生きる私たちは、何を考え、何をおこなわなければならないのか」へと発展させていけるのではないだろうか。その意味でも、日本の加害・被害の事実は、両方をきちんと教える必要がある。

## 15時間で構成する15年戦争の単元

その加害と被害の事実を結びつける内容としては、形勢が逆転していく事態の中で、どう考えるのかを重視してみた。だから、「この戦争でアジア諸国に対して先に日本がやったことであれば、それを日本がやられることは仕方がないのか」と投げかけている。このことは、加害と被害の両方の事実を理解していないと答えは出てこない(あるいは、答えは出ないかもしれない)内容である。この問いかけに、本当にどうなのかと悩む生徒もいれば、意外とあっさりとは仕方ないと思う生徒もいる。だからこそ、時間をかけて授業をおこなう必要がある。そのため15年戦争の単元は15時間で計画をしている(ただ、1時間で計画している授業を2時間かける場合も出てくるため、実際は15時間で終わらないこともある)。

### 「どうして、日本はこんな戦争をやったのか」

さらに生徒の考え方を見ていると、「当時の日本の状況から考えて、どうして戦争をやめなかったのか」も重要な問いかけになるようだ。それは、「日本は、もう戦争をやめるべきではないのか」との発問に対して、「あと少し」「ここで戦争をやめたら意味がない」「これまで手に入れてきたものがなくなる」「これまでの犠牲が無駄になる」「これまで日本がやってきたことを考えると仕返しをされる」と考えて、ずるずると戦争を止める機会を判断できない生徒が多いからだ。当時も、その判断は難しかったと思うが、歴史学習においては、当時よりも判断ができるようであればならない。そのためにも、なおさら「どうして、日本はこんな戦争をやったのか」という基本的な問いかけが大事になってくる。

### 揺れ動く生徒の判断

単元全体に授業時間の余裕があるときには、「どの時点で日本は、その進むべき道を間違ってしまったのか」を論題に、討論会のような授業を1時間設けて実施していたこともあった。その授業での生徒の答えは、「満州事変」がいつも1番多かった。最近は授業時間の関係でこうした授業は実施したことがないが、もし実施するとしたら、「日本が間違ってしまった1番の出来事が『満州事変』だとして(その満州事変の前後で)、2番目の時点は、いつの、どんな出来事だったのか？」を論題にして討論をさせたいと考えている。そうすることで、単純に「満州事変がいけなかった」だけではない見方や考え方を生徒から引き出していけるのではないかと考えているからだ。

もちろん、授業では何度となく「日本は、このまま突き進んでいいのか」と問いかける場面を設定している。この問いかけに対しては、日本が戦争へと突き進んでいくことに、賛成・反対の両方の意見が出てくる。それは、生徒の考えも両者の間で揺れ動いているからである。そんな中で、話し合い活動を続けていくことが深く考えることになっていく。だから、その話し合い活動の時間を確保するためにも、授業では全体の流れを重視して、教師の指導言に勢いがつくようにしている。

### 中学生にどこまで教えるのか

授業では、戦争の事実を取り上げるのだが、中学生の授業として適切なかどうかを悩む事実もある。たとえば、中国での日本軍の蛮行やナチスドイツの強制収容所や731部隊での人体実験などの事実である。これらは、中学生にとっては、内容が衝撃的過ぎるのではないかとも思えるからである。また、授業内容が記憶に残りやすいように映画(の場面)を見せることもある。しかし、映画は制作者の意図が入り込んでいるため、その点を理解した上で使用しないと、かえって逆効果のときもある。そこで、授業で映画を使用する場合、どこを見せるのか、またどこまで見せるのかについて考えることになる。しかし、中学生は、こうした自分たちが知らなかった事実とか視覚に訴えてくる映像には食いついてくる。

つまり、授業への参加度が高まる。だからこそ、授業でどこまでを教えるのか悩むことになる。

ただ一方では、「こうした事実を、小・中・高校のどこで学ぶことになるのか」を考えると、やはり中学校で教えておかなければならないとも思う。小学校では内容が衝撃的すぎるし、かと言って高校の授業を参観した印象では、そこまでの事実は扱っていないように感じるからだ。

だから、迷うようであれば、中学校で教えておこうと思ってしまう。そして、もし高校で教えてもらうことがあったとしても、そのときは中学生とは違った受け止め方をするに違いないという思いもある。むしろ中学校で学んでいた方が、そうした事実に対する考えを深めることができるのではないだろうかと考える。

## 2年生で実施できなければ3年生で

実は2年生の歴史の授業において、戦後の単元まで進むことは少なかった(その意味でも、15年戦争の単元を歴史学習のまとめと考えていた面がある)。15年戦争までは何とか進めるのだが、戦後まで授業をするのは難しいのが現状だった。だからと言って、戦後の授業をやっていたわけではない。2年生で実施できなかった場合には、3年生の公民の最初か最後の単元(「現代社会」か「国際社会」)で、戦後の歴史を振り返る形として授業をおこなってきた(そのためには、当然のことながら公民の授業内容を精選して、戦後の歴史ができるように工夫しなければならなかった)。

ところが、2012年度の新課程からは、確実に3年生の授業として戦後の単元が実施できるようになった。現行の教育課程での授業時数は、3年間を見通すと多少変形ではある。ただそのことを肯定的に見ると、15年戦争の反省を活かして戦後の授業、そして公民での憲法学習へとつなげられる利点となっているとも考えられる。そこで、そのことを意識して3年生の授業をおこなっていくことで、いまを生き、これからを生きる生徒の思考を発展させていけるのではないだろうか。

## 公民の授業で

公民の授業で「今後、自衛隊はどうあるべきか?」について討論をおこなった。A:縮小・廃止に B:現状維持で C:増強・拡大を D:国防軍に の4つの選択肢の中から結論を選び、意見を出し合う形での討論をおこなった。このとき(2013年)、新たに「D:国防軍にする」を選択肢として設けた。それは、ある雑誌の表紙に内閣総理大臣の顔写真とともに、この主張が載せてあったため、「これは資料として使える」と感じたからだ。結論は学級により違っていたが、BやAが多かった。また、尖閣諸島や竹島などの領土問題が話題になっていた時期でもあったためCの意見もあった。しかしDだけは、どの学級からも出てこなかった。「先生、(領土問題もあるけど)いくら何でも軍隊はダメやろう」という声が聞かれた。これは15年戦争の授業の中で、「日本軍が、どんなことをしてきたのか」「軍隊とは、どんなものなのか」を学び、「軍隊だけは今の日本には必要ない」という生徒の考えのあらわれだったようだ。

また、選挙制度や政党について学んだ後、「どうして現政権の政党に投票する人が多いんですか?」との質問を受けた。それは、政党名を伏せて各政党の主張(集団的自衛権など)を示し、どこを支持するのかで話し合ったときに、現政権担当の政党を支持する生徒が一番少なかったからだ。つまり、「日本の安全についての自分たちの考えと、なぜ現実が違うのか?」という素朴な疑問だったようだ。

これらの生徒の声は、15年戦争の授業での討論を通じて学んだことが、こうした形で生徒の心の中に残り、そして活かされていることを感じさせられた場面であった。また、討論をおこないながら学んでいく授業の大切さを感じさせられた場面でもあった。